

備

和書類

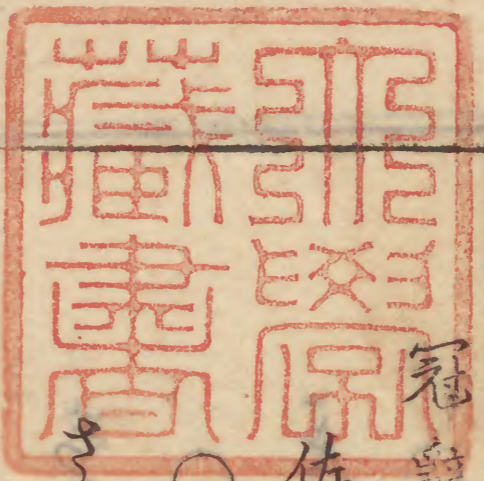
Shirayama

和書門			
二〇七	七	七	五
六〇	〇	七	五
九六	〇	七	五
冊	架	函	號

內閣文庫			
二〇七	七	七	五
九六	〇	七	五
冊	架	函	號

內閣文庫		
番號	和	20775
冊數	9 (3)	
函號	202	192





冠辭考卷四

佐志須世曾

○佐部十八



さしむしれ下のさほ

さしむしれ下のさほ

さつぐの

さふづり

さごり

さつぐの

さかふの

さだくふ

さまひ

さたま

さひん

さまひ

さねづり

さひん

さまひ

さくし

さしむしれ

さまひ

○志部十九

さしむしれ

さまひ

志ぬ火の

志まー

志あー

志かぎら

志づづく

志しー

志りー乃

志まーの

志まー

志まゆ

志ほーの

志ーの

志ぐー乃

志あー

志まー

志ー乃

志さほ

志ぬの乃

志あーゆ

志まー

志まー

○須部 二

志ぢぢ乃

志ぢぢぢ

○曾部 二

志ー

志ー

冠辭考卷四

佐志須世曾

○佐部



志賀 大津の字 志賀
同津津神 大山より 平山

萬年集云、左散難弥乃志我能太和太、樂浪
之思賀乃平崎、卷二、東神樂波之志賀左射禮浪
敷布尔卷七、神樂聲浪乃四賀津之浦能、又集
中、樂浪乃と、大津宮、故京國都美神、大山守、平山
風、たゞとつと、きもり、こハ近江の志賀郡、ある、彼、
て、地、よ、て、み、この大名、ある、あ、よ、そ、より、の、あ、ハ、冠、し、を

今昔物語十巻
志如之部傳は山
傳傳の七柄の中
云ハスの比々
傳あり一トト
別ハニトゆ
云ハスの比々
云ハスの比々
云ハスの比々

くもる也地の名なりするハ神功紀及干狹々浪栗林

云欽明紀千近江發自難波津ヒキテ控引船於狹々波

山而云天武紀會於彼浪而探捕左右大臣

とまらりてしりりさくそ後ハ小竹之浪を借字を藤

のまてあまあびく物よハつまらり古事記傳志那

由布佐々那美遲とよまらりハ藤原道よまらり

もあそよ神を寄らりハももももも地ハあよ志

授々を落て寄らりハ近江の湖よりりてまらり波

少後を寄らりハかまらりその浪のまらり

波まらり卷二左射礼浪卷十三汝邪礼浪など下の

さよ留る字をまらり志まらりハ神樂波之志カク佐

射禮浪カクとよまらりハ上の神樂波ハ河よりりなれ知れ

○彼あまを神樂聲浪とまらりハ古ハ神樂カクラよまらり

ひ物のまらりハあまらりハ今も休ハふは藤波ハまらりハあまらりハあまらりハ

さく神樂浪樂浪ハまらりハまらりハまらりハまらりハまらりハ

は鳥まらりハまらりハ多ハ嵐ハ山下出風ハまらりハまらりハ山下風

とも山下ハのまらりハまらりハ類也

さざれ波

万葉卷三小浪磯越道有能登湍河音之清左多
藝通瀬毎尔こま小波の磯を越とハひハまらりハまらりハ

勢路 セダ 卷七 シ 吾勢子 ウセシコ 乞許世山 キコセマ とつぎやまひひ
 あり。○この小浪 サシ 右の彼 サバ ありとハ異なり。下の サ を
 和名鈔 ワナシ 泊瀬 ウツノ 浅水 アサミ 貌也。 左ガ良 卷十二 シ 佐々浪
 之波 ノハ 越安 コノス 哲仁 サカニ 云 サ ありとハ異なり。 右ガ良

巨勢 キセ 八 ハ 和名鈔 ワナシ 高市郡 タカシ 巨勢 キセ とあり。巨勢 キセ 路 チ
 之 シ 卷十二 シ 高瀬 タカセ 尔有 ナラバ 能登瀬 ノト 乃川 ノカハ と 右ガ良 あり。 左ガ良
 激 シ 云 サ 此 コノ 也 ナリ と 右ガ良 四言 シヨク あり。

さつぐ人乃 サツグヒトノ ゆづき ユヅキ あり

万葉卷十 マンヤクマクジウ 佐豆人 サヅヒト 乃弓月 ノユヅキ 我高荷 ワタカネ 云 サ 古事記 コトワザキ

火照命 ヒテリノミコト 海 ウミ の佐知彦 サチヒコ と云 サ 紀 キ 云 コト 有 ア 海 ウミ 幸 サキ 幸 サキ 幸 サキ 幸 サキ 幸 サキ

簾 ハタ の狭物 サキモノ を弓 ユ 火遠 ヒトノ 理余 リヨ 八山 ヤチヤマ 佐知彦 サチヒコ と云 サ 毛鹿物 モシカモノ

毛柔物 モノ を取 ト 弓 ユ 神代紀 カムヤマトキ 八兄 ヤチニイ 以 ヨリ 弟 ニイ 幸 サキ 弓 ユ 入山 イリヤマ 竟 マタ 歎 ナク

弟持 ニイテ 兄 イニ 之 ノ 幸 サキ 釣 ツリ 入海 イリウミ 釣 ツリ 魚 イサ 云 サ 云 コト 云 コト 云 コト 云 コト

始 ハジメ 弓 ユ 矢 ヤ 矢 ヤ 山 ヤマ の多 オホシ 歎 ナク を サ 人 ヒト を サ 山 ヤマ の サ 弓 ユ の サ 人 ヒト

都 ツ と サ 通 ツ へ サ 後 ノチ 云 コト 云 コト 云 コト 云 コト 云 コト

あり サ 弓 ユ 矢 ヤ 矢 ヤ 物 モノ を サ 御 ミ あり サ 也 ナリ 云 コト 云 コト 云 コト

又 マタ 弓 ユ 矢 ヤ 矢 ヤ 佐都夜 サツヤ と サ 云 コト 云 コト 云 コト

弓櫛嵩ハ卷七ニ痛足河々浪立奴卷目之由櫛我
高仁雲立有良志とよめハ大和國城上郡ニあり。

糸づよ
ヨガ大き
ひま
ひま
ひま

万葉卷三ニ狹丹頰相吾大王者卷十ニ左丹頰經妹
手念登卷七ニ旋頭雜豆臘漢女乎座而卷十三ニ散釣相
君名曰者云云左ノ事也丹つらふ事卷七

山跡之宇陀乃真赤土左丹著者卷十六ニ丹津故
經色丹と云又他老ニ丹著る事ツラフ事同ト云
通ハ一途てはつとハツと云々
をづくが嶺

六ニ之具禮乎疾狹丹頰歷黃葉散作卷十一ニ散頰
相色者不出卷十二ニ左丹頰合紐開不離事也

をづくが嶺
をづくが嶺

万葉卷十四ニ常陸左其呂毛能乎豆久波祢呂能
云云今を衣ニハヒモとの
ハヒモとの
ハヒモとの
ハヒモとの
ハヒモとの

此山ハ和名鈔ニ常陸國筑波郡ニ筑波御あり

そくふあり

さくく乃

あさこまきりて

万葉巻一

輕皇子、宿安時
野時人麻呂

サカトリノアサコニシテ
坂鳥乃朝越座而云云

谷のまぐしまぐしは宿願するをたれマシタ朝アサの辨シて山の

ふもゆるあやとをたれしりまのまを供奉乃

まらぐの山路おし越えりきそ坂路イナ

このまをありきをまらぐそのまをたれゆめたれ

坂まらぐと云々トナミハルサカテ鳥網張坂手トキと云々

さくかう乃

くのめあり

允恭紀

衣通姫天皇

ワガセコガクベキヨヒナ
和饑勢故饑勾倍ク枳豫ヒ磬ナ

利リ佐サ瑤ホ饑ガ泥子能ノ區ク茂モ能ノ於ノ虛コ奈ナ比ヒ虛コ豫ヨ比ヒ辭シ流リ詩シ

毛モ古今和歌集イるも今一者イとイ儼イ物モノをさシぐグの

衣イまマかカるル我ワををくのめノのノしシりリとト私記シ佐瑤サ

饑ウ泥チ蜘蛛メ之ノ別ワ名ナ也ナ言ハ其カ體ミ如ニ蟹ヘ住ス左サ々々原ハラ故ニ云フ也ナ

かカーーさサいイんンををりリつツのノちチあアれレハハ好コくクををるル

こコ且ニ格キををたタるルのノあアけケにニしシるル一ヒつツををりリすス

本草ホ又マ葭カ雞ニ桑サ牛ウあアらラのノ類レあアるル且ニ古コハハ蟹カニ

をかぬと云つる人のさふての解を百かよよ人之聞

金カネともちりる○右の奇を詩シ東トウ蟪ク蛸ク在ニ戸カド陸リク機キ

云一名長崎ナガシキ荊州シユウ河内カニ人謂之喜母イハレハニ此虫来著人衣チ

當有親客至有喜也。このまゝ似たり。されど元茶の御
時も、他のふ乃書のみよりて久しかりぬ。はとより
こゝろもさきう後のもえり。いふも入る
さざくかきき さざくとゆると さざくこぎ

成と奈周と訓
とさハ如てや
うく観か

万葉卷三。五月蠅成。驟騷舍人者。卷五。五月蠅
奈周佐和之兒等。遠宇都豆々波。云々。五月を
蠅の飛ぐりさうと。時あしはくもてつり。古事記
。於是万神聲者。狭蠅那須滿万。妖悉發。神代紀。
之。夜者若燂火而喧響之。晝者如五月蠅而沸騰之。
さざくは乃 さざく

万葉卷五。良三枝之中。尔乎祢牟登。云々。
き草ハ福草のさざく一つ。さの末よこの枝あり。
さざくつらさのさ中あるとさうさしハ。集申よ三葉
の中も云くささうま一回。○古今和歌集の序。
さざくこのさも四ださる廣ゆりせりとりつらも。さつさ
さざくのさざくさうさささ。木の芽さうさささ。
その三枝のささ神祇令よ。三枝祭 義解云。謂平川社祭也。
以三枝華飾酒罇祭故。
日三 三 姓氏録よ。顯宗天皇御世。云。三茎之草。生
宮庭。採以奉獻。仍負姓三枝部造。云。治部式よ。福草。
珠草也。朱草別 音娘。和名佐木久佐。 草枝々相
名也。生宗朝中 日本紀私記云。福草。

所も... なる... 也。

さし竹乃

推古紀ニ。既ニ子ノ命ノ片ノ圖ニ遊バ。於テ夜ノ那ス爾ノ那レ禮ニ

奈リ理ナ難シ迷ル夜ノ佐サ須ス陀タ氣キ結キ枳キ弥ミ波ハ夜ノ那ナ祇キ云ハ...

海ノも思ヒ得ルが...古ノも... 試ム...

く... 古ノ史ノ記ニ。雄ノ略ノ大ニ夜ノ麻ノ結ノ賀ノ比ノ尔ノ多ノ知ノ那ノ加ノ由ニ

流ル波ハ毗ビ呂ロ文ク麻カ加ガ斯シ母モ登ト尔ニ波ハ伴イ久ク美ニ隆ク氣ケ

流ル斐ヒ須ス惠エ常ニ尔ニ波ハ多タ斯シ美ミ陀ダ氣ケ於オ斐ヒ云ハ...

既ニ流ル也...上ノ久ク麻カ加ガ斯シノ...久ク麻カ加ガ斯シノ...

梁王の竹園

多タ斯シ負フ陀タ氣キハ...立タ繁ニ竹ノ...

卷ノ十一ニ。刺サ竹ノ齒シ隱ニ有ルと...比ヒ卷ノ三ニ。皮ハ為ズ酢ニ久ク末ニ

と...竹ノの......

...

...

...

...

...

...

...

のしん田抄の
たけなすのまが

くはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらり
 と同く治あるを或は説或は周或は抄一ありて
 万の名となりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらり
 つきりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらり
 よきりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらり
 あらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらり
 ○卷六ハ刺竹之犬宮人乃卷十五ハ佐須太氣終大宮
 人者。云々。こまかの忠とつぎまひりより忠のさけま
 りも冠しきくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらり
 古徳と改りひたるはくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらり
 日月云

あはれもつと下るはくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらりくはらり
 ○卷十六ハ刺竹之舍人
 刺竹ハ古史記ハ夜久毛多都伴豆毛とあり
 万葉ハ八雲刺出雲とかき且古史記ハ景行 意富迦
 波良能守惠具佐万葉ハ卷十 守惠多丸能毛登
 左倍登與美神代紀ハ注 所植此云多底婁あまると
 交ハ刺もまも守惠も古ハ同くハ刺車と小車とあり
 又下のこららがのありハ刺車と小車とあり
 時代刺もこのまもすハは世おいてさけつとあり

○卷十一の刺竹。齒隱有吾背子之吾許不來者吾將

憶メ八方ヤてハ寄物陳思とく。菅小竹スゲ女節花シユ。着冬草シメ

あぢよウ寄物ウケモノの中ナカに入イ。寄草ウケクサてあまらうてハ

ハ寄辭ウケガタハあぢよハ竹タケの葉ハれはぢよハ花ハのこ

よりていつくぬをもその男乃人目思オモう。さぞさうさう

右の刺竹のさもりとつゝまもりて一つヒトツツの振ふるり

或は隠す齒隱有とあるはかみのかみと訓で。字中ニある人ハ聲一語と
らるハ強カクハハはかみかみハ竹を寄辭とす。字のよとせん。
又「寄竹」の葉のまといてあぢよ花れよりとせんハ「寄」さう
ましましうりてあぢよさうさうとせしむ。

さき竹乃

さぎひはけく

又山さげの

さぎひは

一ツツ葉ハ卷七。吾背子ウケガタ何處行ナニトコロイ目跡メノアト。群竹ハタチ之背ノカヒ向ムカ

子シクイノレクヤシモ宿之久スデニク今思イマオモ悔裳キレハ。このさきとらうひと諸シロの（ハ）。

冪（ハ）さ（ハ）り。後（の）さきとらハさとりハかよりとて、先ト
加（比）互（ち）あ（れ）バ（き）も（と）多（く）我（比）と（な）す（く）。 卷十四

東部の可奈思カナシイ伊毛手イモテ伊都知イツチ由可米ユカメ等ナド夜麻ヤマ須氣スゲ乃ノ曾ソ

ガヒニ我比ガヒニ宿之久スデニク伊麻イマ之ノ久キウ夜ヤ思シ母ハハて（ハ）終ハく（ハ）也（ハ）と（ハ）同ト

よ。思オモも須氣スゲと吾我比ウマガヒと吾（ハ）は（ハ）今イマの（ハ）。

おのつ（ハ）ま（ハ）り（ハ）は（ハ）。是（七）の吾背子ハまをりかとま
してまを背向（むか）うて移（うつ）す。

今はさきとらハ寄物とせん。群竹ハタチハ刺サむ（ハ）竹タケ之ノ背ノカヒ向ムカ

るももやうな回（ハ）。

さ（ハ）福（ハ）の（ハ）

のちもあんと

於寐^{オビノム}休武須弥^{スビタレ}例^レ云云。こもきしらるる^レ路の御事と
 つぐまを^{サカレ}小石と^レきし^レの^レも^レひが^レかく^レ思^レる^レもの^レ。
 上の大御^{オホミ}公^{ミコ}乃^ニ万葉^{マンヤク}の^レ四^シ巨麻^{コニシキ}尔^ニ思^ヒ吉^ヒ比^ヒ毛^モ登^ト伎^キ佐^サ气^ケ
 互^テ了^レよと^レあ^レん^レや^レこ^レよ^レやん^レご^レの^レ御^ミ事^{コト}ハ^レ錦^ニと
 用の^レ御^ミ事^{コト}ハ^レ目^メよ^レも^レ万^{マン}葉^{ヤク}も^レ比^ヒ毛^モと^レし^レる^レ御^ミ事^{コト}
 の^レ御^ミ事^{コト}ハ^レ神代^{カムヤマト}紀^キノ^レ衣^イ帯^{オビ}も^レこ^レも^レひ^ヒも^レ刻^キと^レ
 古^コハ^レ草^{クサ}也^{ナリ}と^レ信^シと^レお^レ通^トハ^レし^レり^レひ^ヒも^レ。
 ○又^{マタ}志^シの^レ大^{オホ}津^ツ言^{コト}れ^レ初^{ハジ}り^レを^レ袖^{スリーブ}中^{ナカ}抄^シよ^レと^レぐ^レる^レま^レの^レ錦^ニと^レそ^レ月^{ツキ}面^{オモ}小^コ
 車^{クルマ}と^レハ^レ風^{フウ}俗^{ソク}の^レ名^ナハ^レ今^{イマ}ハ^レ説^{セツ}終^{シュウ}と^レし^レ伊^イ勢^セ非^ヒ文^{ブン}織^{オリ}式^{シキ}帳^{チヤウ}了^レ
 刺^{サシ}車^{クルマ}錦^ニ被^ヒあ^レハ^レ刺^{サシ}ハ^レ借^カ字^ジと^レし^レ小^コの^レま^マ。此^{コノ}ハ^レ大^{オホ}の^レ小^コ車^{クルマ}の^レ御^ミ事^{コト}
 又^{マタ}同^{ドウ}キ^キま^マて^レも^レ車^{クルマ}の^レ御^ミ事^{コト}を^レ思^シて^レ小^コ形^{ガタ}錦^ニと^レよ^レ可^カせ^レら^レし^レ也^{ナリ}と^レお^レわ^レす。

さくくも乃

さくくも乃

又かかを

万葉卷十一^{マンヤククワンジウ}二^ニ櫻^{サクラ}麻^マ乃^ノ苧^ヲ原^ハ乃^ノ下^{シタ}草^{クサ}云云^{云々}卷十二^{クワンジウニ}も^モ同^{ドウ}

つぎの^{ツギ}の^ノま^マち^チ原^{ハラ}と^レ今^{イマ}ハ^レさ^サら^ラう^ウあ^アま^マと^ト訓^{クニ}た^タれ^レ古^コ今^{イマ}六^ム帖^{テウ}

よさくも^{ヨサクモ}と^レま^マを^レよ^ヨし^シと^トし^シと^トま^マん^{マン}料^{リウ}と^レし^シと^ト

さくく^{サクク}て^テの^ノ所^{ショ}と^レし^シる^ル麻^マと^レし^シハ^ハ志^シう^ウり^リや^ヤ今^{イマ}東^{トウ}の^ノま^マち^チ

あ^アま^マが^ガあ^アま^マを^ヲや^ヤぐ^クり^リが^ガか^カし^シ麻^マと^レし^シる^ルも^モあ^アま^マの^ノま^マち^チ

こ^コの^ノま^マち^チと^レま^マを^レ布^フる^ル信^シ濃^{ニウ}御^ミ事^{コト}と^レし^シる^ルの^ノ名^ナも^モあ^アり^リ且^カさ^サく^ク

て^テあ^アま^マの^ノ尾^ビ張^{チヤウ}を^ヲし^シる^ルと^レし^シる^ルも^モあ^アり^リ他^ホの^ノ國^{クニ}と^レ

ま^マの^ノま^マち^チに^ニそ^ソの^ノ名^ナの^ノつ^ツま^マも^モあ^アり^リと^レし^シる^ルも^モあ^アり^リと^レし^シる^ルも^モあ^アり^リ

或人^{オノヒト}と^レし^シる^ルも^モあ^アり^リ
 仙^{セン}の^ノま^マち^チと^レし^シる^ルも^モあ^アり^リ
 こ^コの^ノま^マち^チと^レし^シる^ルも^モあ^アり^リ

志部 志部は... 栗栖乃小野ハ和名鈔ハ大和國忍海郡ハ栗栖郷アリ
 言佐澈久加良とつ... 同。佐比豆苗と佐澈久ハ同
 〇幸碓ハ韓碓也。和名鈔ハ碓。賀良。踏碓。具也と云。

志部

萬葉卷五ハ。斯良農比筑紫國。卷二十ハ。之良奴日筑
 紫國波。卷三ハ。白縫筑紫乃綿者。云。云。之志乃ぬひ
 火國。於是日没也。夜冥不知著岸。遥視火光。天皇詔
 挾抄者曰。直指火處。因指火往之。即得著岸。天皇問
 其火光處曰。何謂是也。國人對曰。是八代縣豐村。亦尋其
 火是誰人之火也。然不得主。茲知非人火。故名其國曰火
 國。且直ハはるぬひし。四言よみみつ。
 志部ハはるぬひ
 志部ハはるぬひ

白陸と云ハ
指す所ナリ

万葉卷十三人麻呂志貴島倭國者事靈之所依國叙キニシモノヤマトノクニニ

式嶋之山跡之土丹卷九天不元年磯城島能日本國乃イソノ島ヲイフニ

石上振里尔云々崇神紀三年九月遷都於磯城ワラキニ

城是謂瑞籬宮欽明紀元年七月遷都倭國磯城郡キニコレヲスルミナト

磯城嶋仍號為磯城島金刺宮カサザシノトとある

よあるは年おひりきりてなまざるはさるはよりおのづ

大和の国の今一つの名はかくぬよ之仍て後よと所の

都とあるも、ワラキニなる所を都とてあるありん

大和島初と申すは、ハ殿やおとのひとて之奇島倭人

者和禮自久ハワラキニとてよもよめりて都とす所の名の一

國の名のあくまやうしを、ハ大和の一國の名のあくま

皇國の名のあくまやうしを、ミツクニ大和の都とす

つと又、ハ大和の吉野離宮とて、イニシニヤ

これより、ハ大和の磯城の都と

きて、ハ大和の都とす

これより、ハ大和の都とす

志貴島

推古紀片田山斯那提流箇多鳥筒夜摩尔萬

葉卷九河内書飯野片是羽河之卷十三師名立都

久麻九野方云々紹る物とす

之奈謝可流越爾五箇年住々而射の字もほりうらふ
坂在故志尔之須米婆射の字もほりうらふ
語多しらく諸の國よ寄りて此の志奈謝かほり
くも越のまののしりて然れハ右の科坂左と云い
ふよのしりて階坂ある越のまのしりて
性反しるる愛糸の関路を始とて物も階坂多
國也登ハ信濃國を古々科野と書るの郡も埴
科更級あり波閉科書科あり神社もくまらハ
山ふりて級坂あり地の名とありて思ひ合ふべし

ちのぼく

ゆきりつぎて ゆまハカハ

万葉卷三坂上戸女神 久堅之天原從生來神之命天
日命と 奥山乃 賢木之枝尔 白香付木綿取付而齋戸糸
忌穿居卷十二穿物 白香付木綿者花疑事社者
何時之真坂毛常不所忘此の糸綿を白後と云ふ
物あるハちのぼくと寄りてりひりり付るもの物
けのぼくの
○卷十九遺唐使の大海 四舶早還來等 白香著
朕裳裾尔鎮而將待此の糸綿を白後と云ふ
ちと回しけりてけりて

記云以閑蕪紡麻貫針刺其衣襦云和名鈔云卷子
閑 蕪 紡 麻 貫 針 刺 其 衣 襦 云 和 名 鈔 云 卷 子
義閑菴所傳續麻圓卷名也
義 閑 菴 所 傳 續 麻 圓 卷 名 也
之のあもせりよ
之 の あ も せ り よ
のあもせりよ
の あ も せ り よ

附てりよ

倭文てよ布ののりハ神代紀云倭文神建葉槌命云
倭 文 て よ 布 の の り ハ 神 代 紀 云 倭 文 神 建 葉 槌 命 云
倭文神此云斯圖利我未古語拾遺子天羽根雄
倭 文 神 此 云 斯 圖 利 我 未 古 語 拾 遺 子 天 羽 根 雄
命倭文速織文布と云りかくて倭文を古へ云よ
命 倭 文 速 織 文 布 と 云 り か く て 倭 文 を 古 へ 云 よ
ののちの中よ武烈紀云於哀杵源能源於寐能
の の ち の 中 よ 武 烈 紀 云 於 哀 杵 源 能 源 於 寐 能
之都波拖夢須寐陀黎陀黎耶始比登謀阿遊於
之 都 波 拖 夢 須 寐 陀 黎 陀 黎 耶 始 比 登 謀 阿 遊 於
謀婆難俱你萬葉卷十一よ去家之倭文
謀 婆 難 俱 你 萬 葉 卷 十 一 よ 去 家 之 倭 文

結垂孰云人毛君者不益
結 垂 孰 云 人 毛 君 者 不 益
結垂誰之能人毛君尔波不益
結 垂 誰 之 能 人 毛 君 尔 波 不 益
之倭文幡乃上の旗幡
之 倭 文 幡 乃 上 の 旗 幡
帯解替而云け四首ハ四布と
帯 解 替 而 云 け 四 首 ハ 四 布 と
せもそりろあよ狭織やよ卷十三よ倭文幣
せ も そ り ろ あ よ 狭 織 や よ 卷 十 三 よ 倭 文 幣
乎手取持而卷十七よ神社尔底流鏡之都尔等
乎 手 取 持 而 卷 十 七 よ 神 社 尔 底 流 鏡 之 都 尔 等
里蘇倍己比能美底云延喜式云神代多事
里 蘇 倍 己 比 能 美 底 云 延 喜 式 云 神 代 多 事
能大御心毛云臨時祭式同度の注文よ倭文二
能 大 御 心 毛 云 臨 時 祭 式 同 度 の 注 文 よ 倭 文 二
端長各一丈四尺
端 長 各 一 丈 四 尺
廣二尺二寸
廣 二 尺 二 寸
ののちの衣もせりよ
の の ち の 衣 も せ り よ
目よつゆめまめく

係集中の伎傳
トシノ記志ニ依テ
 一ノ粗布を懸
 久ノ事アリ。此ノ
 昂上ノ儀也

後ノ神ヲ獻スガリ。サキハシモトツ母ノ
 のモノ物ある。此ノ万葉集ニモシテ古ノ
 あり。且皇朝ノ古ノ文あり。布ニシテ是
 也。文ノ布トシテハ。文ノ指ヲ釋日本
 紀ニ。この古語拾遺ノ文布ノ事ヲ奉テ次
 々。建久諸祭興行之時。大藏省年預申
 有。正月筋文之布也。ハ。實ニ古ノ物
 也。ハ。後ニシテ。織ノ物ノ事ハ。或
 人ハ。倭文トシテ。此ノ事ヲ述ベ。ト
 云フ。且。武烈紀ニ。大君ノ御帯ノ倭文

賤ハ
下校ト云エ下
 校ト云フ。トシテ
 云々ト云フ。

結ビ。ハ。ヤン。トシテ。神ノ事
 又万葉卷一。雄略大。此岳尔菜採須兒。
須ハ志トシテ
 反トシテ賤
見ノ事見
 ト云フ。トシテ
アキラ
 タハ
此ハ倭文ノ古ノ事ヲ述ベ。ハ。賤ノ男
 賤ノ女トシテ。男トシテ。女トシテ。諸ノ事
 あり。

志乃乃

乾有とほし
組ハ集中ノ例
 アサゴロモキテ
 麻衣著卷九。白栲之我衣手者。卷十三。白木
 綿之吾衣袖裳。通手沾泥。卷六。白妙之袖。左倭所

万葉卷一。持統大。白妙能衣。乾有。卷二。白妙乃。
御秋
シロカハノワガコロモトテ
ハ。ワカコロモ
 テ。モ。一ホリテ。ヌレヌ
ソデサ
 ハ

白木綿と合本
二ミヤノ米ト訓
タマハシ

沾而卷五志路多倍乃多須吉乎可气卷二白妙之
天領中隱云々白布の衣云々神云々

禪云々領中も布云々目多倍云々
絹布云々中云々白多倍云々穀云々

布云々穀云々布云々穀云々

物云々多倍云々物云々多倍云々

帳等云々白布云々庶人云々可用云々麻布云々喪葬云々

令義解云々錫紵者細布云々同集解云々不限布云々

細色布也云々万葉卷十三挽歌云々大殿
兵振放見者云々白細布云々飾奉而内日刺宮舍人方雪

穗麻衣服者云々古語拾遺云々植穀造白和幣植麻

造青和幣云々神祇式云々明多閉照多閉云々

和多閉荒多閉云々明和幣云々和幣云々

て白多閉ハ穀云々布云々例云々

木綿ハ古ノ稗
放云々和云々

○細布ハ本布也
又同ハ細布也

○布のぬをばり
ぬをばりハ細

○和之司を男
和之司を男ハ

○白多倍ハ右
白多倍ハ右ハ

○細布ハ
細布ハ

○霜落卷十三
霜落卷十三ハ

○丹保布信土
丹保布信土ハ

○修光と穂
修光と穂ハ

今もて、多聞ハ布ノ伎ハ織目ノくくして和やうなること
ふりきり思ひ出せりよふ事、限りあり多し、一ノより二の

又神祇令ノ神衣祭ノ集解ハ神祇部書ニ云、以三河赤引神調ヲ神
衣織作、麻、藤、連、等、麻、纏、而、敷、和、神、衣、織、奉、て、式、の、和、妙、衣、者、服

部、氏、荒、妙、衣、者、麻、藤、氏、各、自、繫、戒、於、九、月、一、日、織、造、と、云、云、

此、の、和、妙、衣、ハ、布、を、用、い、て、造、り、て、之、を、着、用、す、と、云、云、

霜、落、卷、十、三、ハ、雪、穂、麻、衣、服、者、也、ハ、卷、七、ハ、白、楮、

○白多倍ハ右の如く白布のゆあふ、上つて、下より、漸より

かゝれ、まづ、これ、を、用、と、辨、し、ひ、あ、る、事、

卷三ハ、折、白、細、尔、舍、人、装、束、而、白、楮、尔、衣、取、著、而、あ、る、ハ、

ハ、真、白、よ、て、ま、え、ま、か、げ、き、

○まづ、卷一ハ、楮、乃、穂、尔、夜、之、

霜、落、卷、十、三、ハ、雪、穂、麻、衣、服、者、也、ハ、卷、七、ハ、白、楮、

丹保布信土之山川尔とよある如く、楮のゆあふ、

修光と穂と、ゆあふ、の、ゆあふ、ゆあふ、ゆあふ、ゆあふ、ゆあふ、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

難コナニも敷タ細ヘ之衣手可禮天卷十七之伎多倍能

蘇泥可幣之都追宿夜於知受ニハ夜の衣袖

○卷一敷妙之枕之邊忘可祢津原卷二布拵

乃手枕纏而卷十二布妙之枕毛衣世尔卷十一

敷細布之枕通而袖副沾奴こまの枕よつて

○卷五敷多倍乃登許能邊佐良受云こま夜床

まじりけたが昂板の物はりよ

○卷三枕布細乃宅手毛造同及敷細乃家従者

出而雲隱去寸こま寝衣より一びりりてお

まじりてびりりてま所宿家よりりりりて

下の條の敷藻相屋とりあ敷あひの山とり

嵐岩ももつくふふ

○卷四田部棟子が太置而行者妹將戀可聞敷細乃

黒髪布而長此夜乎こま末のまかや原のま

がしがあるよがあるよのはをあるよ

又上のまつてきくるる敷くるる細布とてま

衣の敷まりしるる古ま記ふ年斯支復麻

尔古夜賀斯多尔多久支復麻佐夜具賀斯多尔阿

和由伎能和加夜流年泥乎云云万葉よも丞被古

乃夜床母荒良無所虛故名具鮫魚天氣笛敷藻相
 屋常念而玉垂乃越乃大野之云云この敷ハ上條と
 乃多田名附柔膚尚平劔刀於身副不寐者烏
 美織ととていふもや
 志きとあふ

万葉卷二河島白子其時其書泊磯部 靡相之婦乃命

乃夜床母荒良無所虛故名具鮫魚天氣笛敷藻相
 屋常念而玉垂乃越乃大野之云云この敷ハ上條と
 乃多田名附柔膚尚平劔刀於身副不寐者烏
 美織ととていふもや
 志きとあふ

諸國貢獻の中下野國の羽剝を義解和名は氈加毛之屬毛席也下野國

集中カモ加母カモ了カモ解カモの字を供カモするカモなまカモとカモ入カモ貝
よつ母カモをカモ獸の皮をカモをカモ席とカモ。まカモしカモ毛カモをカモもカモさカモすカモ
もカモいてカモ織カモするカモ席カモをカモ用カモめカモるカモ中カモはカモ右カモ卷カモ十カモ六カモのカモまカモ
よカモあカモらカモくカモ麻カモのカモ糸カモをカモ他カモのカモ糸カモとカモもカモまカモさカモすカモ

ちカモくカモまカモゆカモ

ちカモのカモ細カモらカモのカモ山カモ

万葉卷十は白檀弓今春山尔去雲之卷十一は白檀
后邊山卷十二は白檀斐太乃細江之菅鳥乃云上
るカモ語カモをカモ隔カモてカモ張カモとカモつカモきカモ次カモをカモ射カモとカモつカモけカモもカモ次カモをカモ
引カモをカモ引カモきカモしカモ比カモとカモらカモひカモうカモきカモもカモりカモさカモらカモひカモかカモらカモひカモ
をカモ引カモ板カモ者カモへカモとカモらカモるカモ引カモ板カモをカモ後カモのカモ山カモ回カモのカモ形カモとカモいカモへカモ

○檀ヒキタまヒキタきヒキタ弓ヒキタをヒキタ家ヒキタよりヒキタ一ヒキタくヒキタハヒキタ則ヒキタまヒキタりヒキタ
あヒキタらヒキタもヒキタ負ヒキタうヒキタるヒキタまヒキタりヒキタ一ヒキタくヒキタハヒキタ則ヒキタまヒキタりヒキタ
ちヒキタしヒキタバヒキタなヒキタまヒキタりヒキタのヒキタうヒキタらヒキタひヒキタらヒキタしヒキタちヒキタのヒキタ檀ヒキタ弓ヒキタとヒキタあヒキタらヒキタ
ちヒキタしヒキタバヒキタなヒキタまヒキタりヒキタのヒキタうヒキタらヒキタひヒキタらヒキタしヒキタちヒキタのヒキタ檀ヒキタ弓ヒキタとヒキタあヒキタらヒキタ

斐太細江ハ大和の葛城の意又ハ方布一郡の巨勢
ふヒキタらヒキタもヒキタ負ヒキタうヒキタるヒキタまヒキタりヒキタ一ヒキタくヒキタハヒキタ則ヒキタまヒキタりヒキタ
はヒキタ葛城長田を佃ヒキタ一ヒキタくヒキタハヒキタ則ヒキタまヒキタりヒキタ
権ヒキタ一ヒキタくヒキタハヒキタ則ヒキタまヒキタりヒキタ
斐太と女の修字の
或は修字の
地を修めて

ちヒキタほヒキタふヒキタぬヒキタ乃ヒキタ

ちヒキタほヒキタふヒキタぬヒキタ乃ヒキタ

万葉卷十四東乎久佐乎等乎具佐受家乎等斯
知古今本の利、本布祢乃、那良、敏、氏、美、禮、婆、乎、具、佐、可、知、馬、利、と、ハ

淡路のありし所のぬのさびびくもおあるいさへへてての後
よ家しやたらさまで二人の男をわうへくへへくへくへへく
くさげハ勝もと女のよああへへへへへへへへへへへへへへへへへ
乎久佐等卷九よ宇奈比壯士智奴壯士らあやく所の
石のくところ所の男よりあるべへへへへへへへへへへへへへへへへへへ
す所の正丁をぐさ受家乎ハ次丁を中男とりあへへへ
戸令よ民の歳十七よハ廿まぐを中男とりし廿一よう
六十まぐを正丁とりし六十十一より六十五まぐを次丁く
是の漢まを甲のこまはまほへく
いざすていざす
とらへくくくくく

イの中用しハ訓ヨハ
イザすていざす

いふはれハその正丁のまぐさげと次丁のまぐさげ
あへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ
まぐとりしむその女あまぐまぐまぐハ正丁あれハまぐへての
取らまぐまぐへてまぐまぐまぐまぐまぐまぐ

あへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ
万葉卷三よ人万鹿自物仔波比伏管卷三よ四時自
モノイハハヒヲカベヒ
神祭の十六自物膝折伏
鹿の膝をおく伏あまぐまぐまぐまぐまぐまぐまぐまぐまぐまぐまぐまぐ
たのぢのりよタラナスイハハヒモヤリ
勢成伊波比廻卷五よ伊奴時母能道尔
布斯豆夜おどりける勢のいへて伊なみの伊ハみお供

萬葉卷九菟原 穴申呂黄泉尔將待跡シラグレ

こ乃六事シラグレを借シラグレりて盤劍シラグレのの成シラグレべし

を盤劍シラグレ美しとほむる後ウニイ子を懸寢ウニイ子一時トキより

うき万ヨミあふハ回ヨミ一劍ヨミを好ヨミとほむるを黄泉ヨミより

出つとらぬとちぐぐサクハ一既サクハ奉サクハ一佐サクハ之々サクハ斯サクハ佐サクハ侍サクハ

須受スズ折サダ鈴スズ五十スズ鈴スズふとの後スズを思スズふスズ鈴スズを盤スズ劍スズを著スズ

る劍スズありてスズハさの儀スズともあしハさの儀スズありて

ふのめ人メトリン古事記メトリンは女鳥メトリン皇女メトリンの玉劍メトリンと大楯メトリン連メトリンりて

書メトリンみ著メトリンしやメトリンるメトリンぐメトリンくメトリンせメトリンとメトリンありメトリン一メトリンとメトリンハメトリン劍メトリンのメトリンあり

あメトリンきメトリンこメトリンらメトリンのメトリン一メトリンしメトリンりメトリン右メトリンのメトリン折メトリン劍メトリンのメトリン條メトリンよりメトリンくメトリンや

劍メトリンハ鈴メトリンを著メトリンる物メトリンありてメトリンことメトリンハメトリン今メトリン著メトリンる人メトリン

○仙メトリン覺メトリン子メトリン系メトリン抄メトリンハ事メトリンを著メトリンしてメトリン著メトリンる肉メトリンを著メトリンる物メトリン

まメトリンハ味メトリンのメトリン一メトリンとメトリンつメトリンくメトリンりメトリン今メトリン思メトリンつメトリン和メトリン名メトリン鈔メトリン厨メトリン膳メトリン

具メトリンハ弗メトリン練メトリン唐メトリン韻メトリン云メトリン弗メトリン和メトリン名メトリン夜メトリン多メトリン矣メトリン穴メトリン弗メトリン也メトリン練メトリン東メトリン弗メトリン練メトリン矣メトリン

具メトリン也メトリンとメトリンりメトリン自メトリン皇メトリン朝メトリンのメトリン古メトリンくメトリン猪メトリン鹿メトリンのメトリン肉メトリンをメトリン借メトリン濟メトリンるメトリンハ

さメトリンくメトリン一メトリンとメトリンつメトリンくメトリンりメトリン今メトリン思メトリンつメトリン和メトリン名メトリン鈔メトリン厨メトリン膳メトリン

てメトリンまメトリンくメトリン事メトリンを著メトリンりメトリン今メトリン思メトリンつメトリン和メトリン名メトリン鈔メトリン厨メトリン膳メトリン

志メトリンハ盤メトリン劍メトリンのメトリンまメトリンありメトリン矣メトリン自メトリン皇メトリン朝メトリンのメトリン古メトリンくメトリン猪メトリン鹿メトリンのメトリン肉メトリンをメトリン借メトリン濟メトリンるメトリンハ

志メトリンハ盤メトリン劍メトリンのメトリンまメトリンありメトリン矣メトリン自メトリン皇メトリン朝メトリンのメトリン古メトリンくメトリン猪メトリン鹿メトリンのメトリン肉メトリンをメトリン借メトリン濟メトリンるメトリンハ

志メトリンハ盤メトリン劍メトリンのメトリンまメトリンありメトリン矣メトリン自メトリン皇メトリン朝メトリンのメトリン古メトリンくメトリン猪メトリン鹿メトリンのメトリン肉メトリンをメトリン借メトリン濟メトリンるメトリンハ

自のふハ集中ニ
考ふるより又借
字ハは厚と雖も
例るハ虫のは虫
一ハかりガ矣
自の候字

宗...
...

萬葉卷七。撰儀の志長鳥居名野乎来者。

撰儀の志長鳥居名之湖尔云云。集申中。

四長鳥居名之湖尔云云。撰多し。...

ふりつらふらふらと云云。...

卒とつづけて卒と云云。唯雄ひきの...

総長と果て...

がての事ハ既神風の條より...

多那と云例...

彦級長戸邊余ハ大御神の息より成る人ハ志...

長と息長と同一のや。...

とハ同一物より息長鳥ハ鵜鷗の...

けり中川...

ふりハ卷二十ニ爾保栲里能於吉奈我河波半多...

延奴等母古支記...

延奴等母古支記ニ美本栲理能迦豆伎伊岐豆岐...

云云の息長河と潜息づきとを對へ見ハ...

此鳥ハ和名沙又鵜鷗。和名野鳥小而好没水中也。

と云り。かく亦底よりして浮出ハ。潜の海人の如く...

長く息づく。...

又ハ亦底に入て久し...

さて卷五ニ尔保鳥能布多利那良毗為卷十八ニ...

尔保騰里能布多理雙坐卷三ニ木鴨成二人雙...

居ありて。...

あつあつあつ。...

和賀韋泥斯仔毛波和須禮士。...

和賀牟禮仔那婆比氣登理能和賀比氣仔那婆安。

とあるも幸て行をいへばお無〜〜〜

水ハ式類切丸ハ ○巻九ハ 蘇上総国末ノ水長鳥安房尔継有梓弓。未
絶の青玉用の丸、
卷十ハ白玉玉、
乃珠名者。云々。こゝろ右よりあかき息長と云ふものありしかん

の長嘆息と云ふハ聲を引て嗚呼と云ふ聲をいふ。

あのひと待たつて〜〜〜。又あま〜〜〜。又あま〜〜〜。又あま〜〜〜。又あま〜〜〜。

卷十四ハ 防人於吉尔須毛乎加母乃母己呂也左可

利伊伎豆久伊毛乎於伎氏伎努可母。このまゝ

沖に栖て八尺の長嘆息と云ふものごとく妻の別る際て

長嘆息をつきて逝つてまもなく〜〜〜。小鬼と

母るは〜〜〜のまゝと云ふ。集中ハ百

不足八尺乃嘆と云ふも〜〜〜。長嘆息のまゝと云ふ

む〜〜〜。

又雨降〜〜〜。又抄〜〜〜。臘鳥皇女と云ふあり。和名鈔ハ

臘嘴鳥 阿止 鴨子鳥。此鳥群飛如列平。満

け二つと合せるとハ志長ハ此嘴長の男と云ふものなり。飛

あま〜〜〜。安房ともいひつゝ

〜〜〜。

息長川ハ天武紀ハ近江軍戦息長横河。云々諸

陵式も息長墓ハ近江國坂田郡と云ふと云ふ

〜〜〜。

今昔物語卷九ハ
近江の坂田郡ハ
息長鳥の人あり
云々。後集ハ
息長鳥の
人ありと云ふ

款も河内よその宮よりひりかへてくちを記す

又河内の石川郡の磯長も、宇治守長の男と云ふ事ありと云ふ
あまをどくし、あまのまはひのそのまをくちんくちあるは

○ 居名ハ猪名ともあて、攝津國河邊郡あり

○ 末了地ハ和名鈔によは徳國用准郡 イロハ

赤房ハ赤巻二幸よは徳國の四郡と別て置たるハ
あつてきりまあり、あまのうらつてくるまきとハよき物なり

志まらるり

うらひがま

古事記よ 神武大御歌 志麻都登理宇加比賀登母萬葉

卷十七よ之麻都等里鷄養我登母波由久加波乃

云ハ島乃鳥の鶴とつきも、あまの野は

ま、家つりうきも、あまの野は

あまの野あまの野 うらひがまハ
播磨のそらま

志まらるりの

さき及山

さき山松

万葉卷九よ 登坂 白鳥登坂山云 レラトリノサギカキ。こハからり

こハからり 登坂 白鳥能飛羽山松之 レラトリノトバエツツ。こハ卷

十二よ ホトギス 霍公鳥飛幡之浦爾敷浪之とすあり

あまのまはひとつきてあまのまはひとつきと云ふ

あまのまはひとつきと云ふとつきと云ふとつきと云ふ

あまのまはひとつきと云ふとつきと云ふとつきと云ふ

2. 獲白鳥養之とハ鶴のゆき出雲國造神貢よ トリテニ
ニラトリヲヤシナフ

白鶴乃生貢とあると云ふ志まらるりと云ふと云ふ

鷺嶋ハ集中ノ山一ノ久世ノさき坂とよそ久
世郡あり。○白鳥飛羽山松之待々曾云ハ大
和のあまのさき文部がよき山ハ大和のさき一。
あつとほりよ ともひ山

万葉卷十四上野志良登保布乎尔比多夜麻乃云
こもさきぬぐり一。整仲ハ詠ハ今案をめぐりしきり。
志玉通ハ終つてまうもくもとりへり。

ともゆり山ハ物色のもよ尔比多夜麻とまうり
くもさハ上野國新田郡の新田山あり一。大和の
佐保ともさほ。岩陸の流波を中流波とよめり。

新乃言おこしと解しをまきて。年新田くまらんゆ

志ぬ乃ゆれ 人よ志ぬハ 志ぬびてぬまハ

秋も朝も備は 万葉卷十一。秋柏潤和川邊細竹目人不顔面公
よて高のまかろ 阿都よりへり。 無勝も朝柏潤八河邊小竹之眼笑思而宿者夢
け志ぬのめと睡の 所見来くもその川邊よはる藤群てよまあつと
思の字も持ひと 訓もも得く 武禮及米あしが小竹の目とりひて志のびとまを料
よかきり。 け例ハ阿の郡よなるの群とあとりくま海。

万葉卷十四上野志良登保布乎尔比多夜麻乃云
るハあまハ志あつと 十。春詠 抄藤春去来者小竹之米丹尾羽打觸而
及ぬ前ハ志あつと 及ぬ前ハ志あつと 及ぬ前ハ志あつと
作と志あつと。 鶯鳴毛とよめり。 小竹群の志あつと。 志あつと。

ワガモヘル
吾念有卷三。足日本能石根許其思美菅根系。
ヒカバ カタミト レノミガ コフ
引者難三等標耳曾結焉。あつちを思へんや
菅ハ山菅あしハ石根あつちを思へんや。あつちを思へんや。
あつちを思へんや。あつちを思へんや。
あつちを思へんや。あつちを思へんや。

○山菅ハ和名鈔ニ麥門冬夜麻須介アツチノク。

古のあつちを思へんや。あつちを思へんや。あつちを思へんや。

あつちを思へんや。あつちを思へんや。あつちを思へんや。

古今集ニ。あつちを思へんや。あつちを思へんや。あつちを思へんや。

あつちを思へんや。あつちを思へんや。あつちを思へんや。

○曾部

あつちを思へんや。あつちを思へんや。あつちを思へんや。

古史記ニ。仁徳の蘇良美都。夜麻登能久。近尔萬。

葉卷一ニ。雄略の大津。虚見津。山跡乃國者。あつちを思へんや。

天亦滿。倭乎置而卷十三ニ。空見津。倭國。あつちを思へんや。

あつちを思へんや。あつちを思へんや。あつちを思へんや。

船而翔行大虚也。脱是郷而降之。故因目之曰虚。

見日本國矣。あつちを思へんや。あつちを思へんや。あつちを思へんや。

あつちを思へんや。あつちを思へんや。あつちを思へんや。

あつちを思へんや。あつちを思へんや。あつちを思へんや。

今本日本書紀
今本日本書紀
今本日本書紀

今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀

今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀

今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀

今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀

今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀

今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀

今本日本書紀の御紀

今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀

今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀

今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀

今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀

今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀

今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀

今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀

今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀

今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀
今本日本書紀の御紀

冠辭考卷四

